

手賀沼が海だったころ

松ヶ崎城跡の植樹と現在



会長 森 伸之

1. 地域の里山としての松ヶ崎城跡

松ヶ崎城跡は、もちろん遺跡であり、文化財ですが、同時に地域の里山でもあります。以前松ヶ崎城跡の植生調査を当会でやったことがあります。その時は松ヶ崎城跡は杉が鬱蒼とはえており、杉以外はその木陰で育つ植物が多かったようです。その後も何度か、植物観察会などを行いました。城跡の中心部の樹木が伐採されたことにより、植生もだいぶ変わりました。

中世は、この地域は手賀沼が現在大堀川や地金堀の下流域となっている部分にも広がり、松ヶ崎城跡のある台地は、その手賀沼に突きだした岬状の地形で、松が生えていたので「松ヶ崎」という地名になったようです。その名前の通り、中世から近代まで、この地は松林が広がった地域でした。

明治初年の松ヶ崎不動尊の絵馬にも大きな松が描かれています。しかし、現代の松ヶ崎城跡には松は無く、今はやや少なくなりましたが杉林があります。

杉林が鬱蒼としていた頃、ドクダミあるいはウラシマソウなどが多くみられましたが、杉が切られてそれらの植物は減少し、大幅に日なたが増えましたので、そのあとは雑草にまじって、いろいろな野草が増えてき

ました。

今は広葉樹が増え、道も歩きやすくなり、松ヶ崎城跡は地域の里山となっています。



<以前の松ヶ崎城跡（西側）>

2. 植樹とその後

松ヶ崎城跡の植樹は、2010年から2012年まで、大きく3回行われています。柏ロータリークラブが2010年2月に河津桜、クヌギ、コナラなどの広葉樹を70本ほど、また当会が市民に呼び掛けて募った「樹木里親」（250名もの方のご応募あり）により、2010年3月1日に河津桜が50本、合計120本ほどがまず植樹されました。

実は2010年2月28日に樹木里親が参加して、実際に木を植え、同時に植樹式を行う予定でしたが、雨天のために植樹は翌日に園芸会社の手によって行われ、植樹式は翌年に延期されました。

なお、子供さんを含む樹木里親の代表（2組の家族）が参加して、植樹樹木の柏

市への贈呈式を同年3月3日（水）に柏市役所にて、秋山浩保・柏市長ご出席のもと行いました。その際、目録と啓翁桜の花束を贈呈しています。

それで、2011年3月27日に「樹木里親」により、シンボルツリーとしてカツラの木を植え、その際に植樹式を行う予定としましたが、東日本大震災が起き、植樹式はやめ、植樹のみ行いました。

結局植樹式を行ったのは、2012年3月25日で、その際台地中段にカワツザクラ3本が、ガールスカウトによって、植樹されています。



<シンボルツリー カツラの木の植樹>



<ガールスカウトの植樹>

これは、さすがに松ヶ崎城跡をはげ山のようにしておくのは、環境の面でもいろいろ弊害があるという判

断から、城跡の土塁や堀、郭の中などは避け、その他の部分に木々を植えていった訳です。

2012年3月25日に当会が主催、柏ロータリークラブ、ボーイスカウト東葛地区協議会、柏市ガールスカウト連絡協議会のご協力、植樹式を行ないましたが、当時の教育長にもご列席頂き、参加者は約80名でした。

その後、順調にカワヅザクラなど植樹した樹木は成長し、特にカワヅザクラは植樹した8年前は幹が直径3cmほどだったのが、今では15cmから20cmくらいにまで太くなり、毎年2月沢山の花をつけるようになりました。



<松ヶ崎城跡の桜>

3. 文化財と自然環境保護

松ヶ崎城跡はいろいろな経緯をへて、今日戦国時代と殆ど変らない姿で残りました。厳密には城跡の土塁は以前はもっと高く、堀はもっと深く、城が機能し

ていた戦国時代初期には、門や柵などの構築物もあったでしょうが、それはなくなっています。ただ、その後の江戸時代、明治以降も延々と城跡の遺構が残り続け、今日の我々のまえにあるというのは、色々な偶然と守ろうという人々の意思の結果だと思います。

長い歴史からすれば、営々として残してきたのですから、文化財であると同時に、人々が憩うことのできる、自然豊かな場所であれば、あまり面白くないでしょう。

松ヶ崎城跡には、様々な植物がありますが、自然に生えているものではヤマユリが華麗なものの代表だと思います。



<松ヶ崎城跡のヤマユリ>

他にアキノタムラソウ、オトギリソウ、チダケサシ、ウラシマソウ、ジュウニヒトエなど、希少なものも含めて、様々な野草があります。

植物だけでなく、テントウムシやトノサマバッタ、

イナゴ等の虫やヘビなども城跡にいます。



<キアゲハ>

それで、当会だけでなく柏市の自然環境に関する団体や大学なども松ヶ崎城跡の植物などを調べに來たりしています。

最近当会は地主のご協力のもと、カシニワの活動に参加、松ヶ崎城跡を地域に公開された里山と位置づけ、カシニワフェスタで松ヶ崎城跡の見学会も行ってきました。

こうした草花などの自然環境をふくめて、松ヶ崎城跡を保存し、次世代につないでいきたいと思っています。



<自然観察会の一コマ>

カシニワ・フェスタ 2018 に例年通り当会も参加



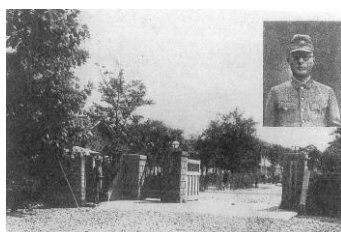
今年のカシニワ・フェスタは、2018年5月16日(水)～5月20日(日)柏市内76カ所で行われ、その一環で、当会は5月20日(日)に松ヶ崎城跡見学会を行ないました。写真は当日の様子(撮影：荒井辰男会員)

●歴楽講座 「柏飛行場と航空教育隊」を開催



- ・講師：森 伸之
(軍事史学会)
- ・日時：2018年10月28日(日)
13時30分～15時30分
- ・場所：柏中央公民館
4F 集会室1・2
- ・会費：500円(資料代など)

さる2018年10月28日、柏中央公民館において、当会は「柏飛行場と航空教育隊」と題した講座を行いました。今年度の歴楽講座の第6回目となります。



< 第四航空教育隊営門 >

柏の航空教育隊は、柏飛行場の南、柏市高田から十余二にかけて、現在の金属工業団地の場所周辺にありました。これは陸軍東部第一〇二部隊、正式には陸軍第四航空教育隊(秘匿名:紺五七二部隊)といい、アジア・太平洋戦争当時、岐阜県各務原の第一航空教育隊、福岡県の大刀洗にあった第五航空教育隊など、各地に設置された航空教育隊の一つでした。昭和20年(1945)の戦争末期に推定4,500人ほどの多くの兵を擁し、その兵員が南北600m、東西400mほどの敷地で軍隊生活を行っていました。当然、兵舎だけでは兵員を収容しきれず、臨時に設営された簡易な宿舎に宿営する兵士も少なくなかったといえます。

陸軍航空教育隊とは、文字通り陸軍の航空兵を教育、養成する部隊で、日中戦争開戦以降、航空兵の減耗率が高くなったことに危機感を覚えた陸軍は、航空兵の養成のために各地に飛行学校とその分校や航空教育隊等を開設していきました。航空機の整備や通信といった航空に関する技術の急速な進歩に対し、各種技術・技能を身に付けた人材は不足しており、それに対応した人材育成も急務でした。その際、航空兵の操縦、整備といった専門分野、「特業」が細かく規定され、この特業別の要員育成が図られたのです。



< 柏市高田の梅林第四公園にある営門跡 >

航空教育隊は、上述のような航空要員の育成に関して、特別幹部候補生を含めた下士官補充教育を主とした航空機の整備や通信など航空技術教育を行う場でした。

第四航空教育隊も、そのような部隊で、昭和13年(1938)7月に立川にて開設され、昭和15年(1940)2月2日に柏へ移駐した部隊です。現在は、営門のほかは、境界標石が3本あるくらいで、遺構は殆ど残っていません。

特に、着目すべきは兵員が、

戦争末期にかけて、かなりの率で増加したことです。昭和13年(1938)8月から5年余りで、全体の兵員は273名から2,937名と10.8倍に膨れ上がっています。

戦争末期の昭和20年(1945)当時の統計がありませんが、4,500名程度の兵員がいたならば、昭和18年(1943)12月の2,937名の1.5倍、昭和13年(1938)8月の273名からは16.5倍にも膨張したことになります。

実際に、この第四航空教育隊に現役兵として昭和20年(1945)1月に入隊した長谷川雅之助氏に聞き取りを行いました。急速な兵員増加の一方で、多くの若い兵士たちは半地下式の急づくりの臨時兵舎に押し込められ、入浴時間も制限され、食事にも困ったという実態がありました。

また、特別幹部候補生を含め、第四航空教育隊で訓練を受けた兵士の多くは、その後外地などに配属され、戦死した人も少なくなかったのです。

講座では、第四航空教育隊の他に、柏飛行場の概要、遺構の残存状況、ロケット戦闘機秋水と地下燃料庫などについても解説が行われ、活発な質疑応答がされました。また、参加者として、当会が聞き取りを行った戦争末期第四航空教育隊所属にされた長谷川氏が来られていました。なお、会場には、霞ヶ浦海軍航空隊や軍艦阿武隈の写真のあるアルバムなども持参し、参加者に見てもらいました。

情報広場

●柏市郷土資料展示室（柏市大島田48-1）

◆展示室開室10周年記念企画展「かしの食卓いま・むかし」

・期間

2018年7月21日（土曜日）から11月18日（日曜日）まで 9時30分から17時
月曜日は休館（祝日、振替休日は開館）

●松戸市立博物館（松戸市千駄堀671）

◆市制施行75周年・開館25周年記念特別展「ガンダーラ—仏教文化の姿と形—」

・期間

2018年9月22日（土曜）から11月25日（日曜）9時30分から17時（入館は16時30分まで）

※無料観覧日 11月23日（金曜・勤労感謝の日）

・内容

仏教美術のふるさとガンダーラ。仏像・彫刻をはじめとする美術品、シルクロードの交易品から、遙かなる仏教文化の世界をよみがえらせます。さらに、日本で華開く仏教文化の始まりについて、発掘された資料から探ってみます。

・会場

松戸市立博物館 企画展示室

・観覧料

一般300円 高校・大学生150円 小中学生無料（11月3日・23日は観覧無料デーです）

常設展共通券 一般500円 高校・大学生250円

●流山市立博物館（流山市加1丁目1225-6）

◆企画展「小金牧—絵図・古文書・発掘調査から見た牧と村—」

・期間

10月13日（土曜日）から平成30年12月16日（日曜日）

9時30分から17時まで
月曜日・11月30日（金曜日）は休館日

・内容

江戸時代、千葉県北西部には「小金牧」と呼ばれる江戸幕府が管理していた馬の牧場がありました。

市内に残る絵図や古文書・発掘調査の成果から当時の牧と村の様子についての展示を行います。

・申し込み不要

・費用 無料

●国立歴史民俗博物館（佐倉市城内町117）

◆企画展示「日本の中世文書—機能と形と国際比較—」

・期間

10月16日（火）～12月9日（日）

9時30分から16時30分（入館は16時00分まで）

月曜日は休館（休日の場合は翌日が休館日となります）

・見どころ

①最大規模の総合的な中世文書展です。日本の中世文書の全体像を学べます。

（総数約260点。「初の総合的中世文書展」となった5年前の「中世の古文書」展の約

220点を上回ります）

②古代律令国家の文書から現代の文書までを視野に入れた、日本の「文書史」になっています。

③東アジアの文書との比較の視点を盛り込み、国際的な視点から日本の文書の特徴が理解できます。

④著名な「源義経自筆書状」をはじめ、多くの有名人の文書も出品されます。

⑤専門的な知識がなくても楽しめます。

●千葉市立郷土博物館（千葉市中央区亥鼻1丁目6番1号）

◆千葉寺地区の遺跡展—地中の歴史をさぐる—

・期間

10月20日（土）～12月16日（日）

展示解説

日時11月17日（土曜日）・12月1日（土曜日）

（いずれの日も10時30分～14時00分～）

・展示資料

千葉寺地区（千葉寺町の一部と青葉町）から出土した考古資料

弥生時代中期土器（中野台遺跡）（千葉経済大学地域経済博物館所蔵）他

柏中央公民館が来年4月から再来年いっぱい休館

柏市教育福祉会館（中央公民館）が「施設の耐震補強及び時代に即した学習施設となるよう」、大規模改修工事のために休館となります。

期間：平成31年4月1日～平成32年12月までの1年9ヶ月間。

その間、当会はアミューゼ柏などを利用することになるかと思えます。

郷土史の窓

千葉氏と千葉・東葛(1)



1. はじめに ～千葉氏と下総地方

平安時代、関東では平将門の天慶の乱、平忠常の乱などの戦乱もあったが、領主として根を下ろし、武士団を形成した坂東平氏は着々と勢力を確立していった。そのなかで、平忠常を祖とする千葉介常胤、上総介広常は、両総で勢力を伸ばし、平治の乱で源義朝が敗れた結果伊豆に流され、そこを脱出した頼朝を庇護した。特に千葉介常胤は、治承4年(1180)頼朝の挙兵のおり、その六子(太郎胤正、相馬次郎師胤、武石三郎胤盛、大須賀四郎胤信、国分五郎胤通、東六郎胤頼)を伴い、下総国府で頼朝と参会した。

千葉常胤は上総介平広常が頼朝によって誅されると、その領地をも併合し、有力な鎌倉御家人としての地位を確立した。千葉氏の本拠地は、もともとは大椎であったが、今の千葉市中心部に進出し、千葉庄を根拠とした。常胤の子らは、下総の各地に散って多くの子孫を残していった。

太郎胤正は宗家として千葉庄、千田庄などの下総の所領を継承したほか、上総介広常の上総の遺領や北九州の小城などを伝領した。相馬次郎は相馬御厨を継承し、奥州行方郡などを領して子孫は奥州相馬氏となった。武石三郎は千葉の武石郷と陸奥の宇多・伊具・亘

理の三郡を、大須賀四郎は下総香取郡大須賀保と陸奥岩城郡などを領した。国分五郎は葛飾郡国分郷、香取郡大戸庄などを領し、東六郎は香取郡木内庄、立花庄、三崎庄などを領した。東氏の子孫は美濃郡上郡にも領地をもち、移住して美濃東氏となった。有名な東常縁は、その美濃東氏の出身である。また元寇に備え、鎌倉幕府の御家人は九州へ下向、一部はそのまま九州に留まることになり、千葉氏の一族でも七代当主千葉頼胤が元寇での戦傷で亡くなると、子の宗胤が九州に下向し大隅守に任じられたが、下総を離れたため千葉氏家督は弟の胤宗が継いだ。宗胤没後、その子胤貞は宗家復帰をかけて胤宗の子貞胤と争うが復帰はならず、胤貞の子孫は九州千葉氏として分立した。

さらに、室町期の享徳の大乱により、鎌倉を追われたものの関東に勢威をふるう古河公方足利成氏につくか否かで千葉家中は対立、古河公方についての馬加康胤や原胤房によって、関東管領上杉方についての千葉宗家は千葉城を追われ、当主胤直は千田庄に逃れて自害、一族の実胤、自胤はさらに市川を経て武蔵国に逃れ、武蔵千葉氏となった。一方、馬加康胤と子の胤持は幕府から派遣された東常縁らの軍勢によって滅ぼされたが、馬加系千葉氏の岩橋輔胤と原胤房は戦い続け、

下総千葉氏は馬加系が継承する。

このように鎌倉時代以降、下総地方は千葉氏の一大本拠地であったが、室町、戦国時代と時代は遷るに従い、享徳の大乱の後も、小弓公方足利義明の登場と上総武田氏、里見氏の勃興などあり、房総は戦乱の様相を呈するなかで、千葉氏の勢力は減退して、わずかに後北条氏の後援のもとで命脈を保つ。かわって、千葉氏の重臣だった原氏、原氏の家老であった高城氏が勢力をもっていくが、ここでは鎌倉期、南北朝期の千葉氏に焦点をあてて、その活躍の場を下総地方の千葉市周辺と東葛も含めて述べることにする。



<千葉氏の月星紋>

2. 千葉氏の出自と名字の地「千葉」

坂東平氏の始祖である高望王は臣籍降下して平姓となり、上総介として下向したが、その子である平国香、良将、良兼、良文らのうち、千葉氏は良文の子孫である。

高望王が臣籍降下し、上

総介として関東に下向したのは寛平元年(889)で、平高望となつてからは国司として職分田が与えられ、空闲地を耕して私営田を獲得することも可能となつた。高望が没すると、その子、国香、良将、良正、良兼、良文らが所領を継承、新たに開墾を行い多くの私営田を獲得、常総に根を張った強大な私有田領主となつていった。

平国香の子、貞盛の子孫は伊勢平氏の平清盛らや北条氏が出て繁栄したが、良文の子孫からは代表的な鎌倉御家人となる三浦氏、秩父氏、畠山氏、豊島氏などとともに、千葉氏・上総氏が生まれた。

◆天慶の乱と平忠常の乱と房総武士団の形成

高望の孫、将門は、父良将の死後、遺領を伯父国香らが押領したとして、伯父国香ら一族と争い、天慶2年(939)11月に常陸国府を襲撃占領して以降、中央への反逆とみなされた。将門自身も武蔵権守の興世王らと組んで、「新皇」と名乗り、関東一円を支配しようとしたが、天慶3年(940)2月国香の子の平貞盛、下野の藤原秀郷と戦い、討死。討たれた将門の首は、京で晒されたという。

この天慶の乱は、関東に土着した平家一族の争いが、将門を「新皇」とした反乱へ発展したものであり、藤原純友の乱とともに、中央政界に大きな衝撃を与えた。

しかし、この将門の反乱

より大きな反乱を起こした者が、平良文の子孫から現れる。すなわち、平良文の子忠頼の子の一人、大きな乱を起こし、一時房総半島一円を支配した平忠常である。

平忠常の乱は万寿4年(1027)から長元4年(1031)までの5年間にわかり、下総、上総、安房の房総三国全体を巻き込んだ大反乱であったが、真の原因は明確でない。ともかく平忠常の官物牢籠に端を発し、長元元年(1028)には忠常は安房国府を襲撃して安房守藤原惟忠を焼殺し、同年7月には上総国府を占領するなどしたが、朝廷から差し向けられた追討使も乱を鎮圧できなかった。新しい安房守藤原光業などは、乱の勢いに恐れをなして国司の印を棄てて京都に逃げ帰った。結局、忠常の主人である源頼信が追討使に任じられると、大友城に拠った忠常はにわかに出家して降伏、京都に護送中に病死し、乱は終結した。

この平忠常の乱により、房総三国が「亡国」のあり様となったと言う。例えば、上総介藤原辰重(時重)が右大弁の源経頼に乱後の上総国の状況を語った話によると、乱の影響により国内の田畑の荒廃は著く、本来の田数2万2984町に対し、乱が終わった年の長元4年(1031)に耕作された田はわずか18町にすぎないという惨状であった。

その忠常の乱後、忠常の子常将らは源頼信の取りなしによって許され、常将と

その子孫らは、亡国と化した房総三国の再開発と繁栄を担うことになる。

平忠常の子孫たちは、平忠常の乱によって、従来の支配関係が崩壊したなかで、再開発を行い、私営田を中央の有力貴族や寺社などに寄進、荘園化して、自らは荘官となることで実質支配するなどして、その勢力を広げていった。

彼らは、名前に「常」の字を通名とする同族意識のもとで、常長の子、常房、常継、常門、常親、常晴、常兼などの兄弟といった有力な者を中心に武士団を形成し、各地に割拠し、大規模な開発を行った。既に常長の代には、上総、下総の各地を支配し、安房の一部にまで支配領域は達していた。例えば平常長の子常房は千葉郡千葉郷や上総国伊南庄鴨根郷を領有したが、子の常益の代には千田庄に所領を得て常益が千田庄司と称したように、千田庄の開発に大いに関わったと思われる。なお、千葉郡千葉郷は後に大椎常重が入部したことから、後に述べるように常房から常重に譲渡されたようである。

◆千葉氏の始まり

ところで、千葉氏の始まりについてであるが、平忠常の曾孫で下総権介であった常兼の子である大椎常重の代に千葉介を名乗ったことから千葉氏は始まるとされる。

また、『吾妻鏡』では、元永年間に「千葉大夫」と称

された平常兼あるいはその子常重が開発領主となって開いた荘園を鳥羽院に献上したとの記載がある。多くの系図は千葉介を最初に名乗ったのは、忠常の子である常将としているが、それを裏付ける古文書の類は無い。

その「千葉」とは、もちろん現在の千葉県の範囲ではない。もともと、千葉という地名は、千葉郡千葉郷、現在の千葉市稲毛区黒砂、穴川辺りを指すが、現在の千葉市中央区、千葉県庁付近の都川が流れる平地部である千葉郡池田郷とともに、その一帯を常重らが荘園として開発し、千葉庄となった。元永年間に千葉氏が開発した荘園は鳥羽院に寄進し、千葉氏は荘園の検非違使となるとともに、千葉庄の実質支配者として所領経営につとめた。いずれにせよ、「千葉」とは、後に下総一円を支配した豪族の権威の象徴である千葉介という呼び名から考えると、あまりに狭くローカルな地名であった。

常重の叔父である常房、常晴も上総、下総で大きな領地を有し、千葉郡千葉郷を常重以前に領有し、そこにおいて武士団を構えたのは常房であったといわれる。常房は千葉郷を大椎常重に譲渡し、常房の系統は千田庄を領有して、千田氏となり、粟飯原氏、原氏が分家していった。

常晴も上総介として上総に勢力を保ち、その孫が有名な平広常である。常晴は当初相馬郡を領し、それを常重に譲渡しているが、

常晴の子、長実が戸気五郎を名乗って土気を領し、孫の惟常は大椎を領したようであり、常晴と常重の間で領地の交換があったと考えられている(『上総下総千葉一族』丸井敬司)。常晴の子常澄が上総氏惣領と常晴の所領の大部分を継承、長実は土気郷を譲られ、その後上総に勢力を広げた常晴の子孫たちは、所領を名字とする多くの支族に分かれた。常澄の子広常は上総氏惣領を継ぎ、玉前庄を領したが、上総氏は製鉄をさかんに行い、軍馬を多量に有するなどして、「鉄と馬」を背景にした強大な軍事力を持った。この上総介広常の支配は、上総一円におよぶが、同時に下総にいた同族に対する軍事指揮権も持ち、広常は両総平氏の族長であった。

常兼は大椎権介と称したといい、上総国大椎(現在の千葉市緑区土気)を本拠としていた。千葉郷を譲渡された常重が、大椎から千葉へ移住したのが大治元年(1126)6月と言われている。また常重は、相馬郷を叔父常晴から譲渡されている。常晴と領地の交換をしたためとはいえ、常重が房総の山間部に位置する大椎から、水運等に恵まれた平野部である千葉に本拠を構えたことによって、千葉氏は大きく発展した。

◆源頼朝を支援して千葉氏発展の基礎を築いた常胤

常重から家督を継いだ常胤は、平治の乱に敗れた源義朝の子で、伊豆蛭ヶ小島に流されていた頼朝が、治

承4年(1180)8月17日に伊豆目代館を奇襲、石橋山合戦を行って敗れ、安房に脱出していたのに対し、その求めに応じて参上し、9月13日には常胤の子、東六郎胤頼と孫の千葉成胤をして下総目代を討たせた。翌9月14日には、平家方の千田判官代藤原親正が千葉庄を攻めたが、千葉館にいた成胤が応戦し、成胤は上総との境の村田川まで押されたが、千葉氏、上総氏の軍勢が駆けつけ、激戦の末に藤原親正の軍勢は千田庄に戻った。こうした戦いを経て、千葉常胤は9月17日には有名な頼朝との国府台参会を果たすことになる。頼朝は上総介広常の参入も得て、上総国府を攻撃、安房から上総に進攻すると、常胤に命じて下総国府を陥落させている。

こうした一連の武功により、常胤は平家方の藤原親正の領地であった千田庄、八幡庄を併合した。



＜千葉常胤の画像＞
菊池容斎画

源義朝の代から源氏と主

従関係を結び、源頼朝の安房からの進攻に当初から支援した常胤は頼朝の信任を篤く受けた。一方、上総介広常は、上総一円の支配力を背景に独立不羈の精神に富んでいたが、その言動が頼朝に誤解されて誅され、嫡男能常も自刃し、上総氏宗家は滅んだ。広常が誅されると、常胤は上総の所領を継承し、源平合戦や文治5年(1189)の奥州合戦の功により、下総、上総の領地以外にも奥州や九州の領地を獲得し、千葉氏は鎌倉幕府屈指の大豪族となった。そして鎌倉時代より千葉氏

は下総国の守護となり、同時に千葉庄の地頭となった。

千葉介常胤の跡は胤正が相続し、千葉介、あるいは上総介を称した。その子で上総の領地を伝領した常秀は上総介を称して上総千葉氏として勢力を振った。その子である秀胤は千葉一族ではただ一人鎌倉幕府の評定衆に列したが、秀胤が宝治合戦(宝治元年(1247)執権北条時頼らが対立する三浦氏を滅ぼした)で三浦氏に連座し、北条方に討たれると、上総千葉氏は滅亡した。

千葉氏は胤正の子で千葉

介であった成胤中心の下総の武士団に千田氏系の原氏、栗飯原氏や千田庄周辺の円城寺氏、三谷氏、鍋木氏、椎名氏などが有力な家臣団として加わることによって再編され、また妙見信仰を千葉氏の惣領の元服式に取り入れるなど、精神的な支柱とすることで、以降の下総千葉氏の武士団の原形が作られた。

(参考文献)『千葉氏 鎌倉・南北朝編』千野原靖方(1995)ほか

(続く)

お知らせ

<松ヶ崎城祭りの準備と当日のお手伝い募集について>

11月11日(日)10時より、18日の松ヶ崎城祭りに向けて、旗立て、たきぎの整理などを行います。お手伝い頂ける方は、松ヶ崎城跡までお願いします。

また11月18日(日)祭り当日、10時~15時半の開催予定ですが、準備委員は9時~城跡で机設置、焼き芋の準備などを行います。当日お手伝い頂ける方、9時~でなくても構いませんので、よろしくをお願いします。

<松ヶ崎城跡に樹木看板を設置>

松ヶ崎城跡に樹木里親の記名板以外の植樹関連の看板がなく、最初の植樹から8年たって、遅ればせながら小さな植樹記念看板を2基設置、また個別の樹名板も、十数枚取り付けました。2基の看板設置は10月31日に行いました。樹名板の取り付けでは、会員ご家族が大活躍でした。



<看板設置の様子>

<会誌「水辺の城」第2号残部僅少>

4月29日発刊の会誌「水辺の城」第2号は既に残部が少なくなってきました。講演録、論文、紀行文など110頁。国会図書館に納本、県立図書館などに寄贈しました。

<原稿募集>

会報への皆さんの投稿をお待ちしています。遺跡などの研究ノート、講演会の受講記録、紀行文や写真、イラストでも、地域の歴史、自然に関わることであれば、何でも結構です。Eメールの場合は info@matsugasaki-jo.net まで。紙の原稿を役員に託されても結構です。

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第39号 2018.11.4

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 口座番号3461475